

7月の栽培管理

平成29年7月7日

リンゴ

○生育状況

6月30日現在の果実肥大は、全県的に平年よりやや小さい傾向となっている（表1、2）。これは6月の平均気温が県南部では平年より2.6℃、県北部では2.2℃低かった影響と考えられる。

表1 県南部のリンゴの肥大状況（果樹試験場：横手市 平成29年6月30日現在）

品 種	調査項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
つがる	果重(g)	46.0	54.5	57.1	84	81
	縦径(cm)	4.35	4.55	4.68	96	93
	横径(cm)	4.76	4.97	5.16	96	92
やたか	果重(g)	40.2	51.9	53.3	77	75
	縦径(cm)	4.21	4.47	4.59	94	92
	横径(cm)	4.47	4.85	5.01	92	89
王 林	果重(g)	46.1	49.8	54.7	93	84
	縦径(cm)	4.94	5.05	5.22	98	95
	横径(cm)	4.39	4.52	4.76	97	92
ふ じ	果重(g)	36.0	39.3	49.4	92	73
	縦径(cm)	4.11	4.10	4.37	100	94
	横径(cm)	4.25	4.37	4.83	97	88

表2 県北部のリンゴの肥大状況（かづの果樹センター：鹿角市 平成29年6月30日現在）

品 種	調査項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
秋田紅あかり	縦径(cm)	3.99	3.98	4.46	100	89
	横径(cm)	3.93	4.15	4.60	95	85
王 林	縦径(cm)	4.16	4.63	4.71	90	88
	横径(cm)	3.68	4.09	4.21	90	87
ふ じ	縦径(cm)	3.87	3.97	3.84	97	101
	横径(cm)	3.72	4.01	3.93	93	95

※平年値：平成19年～28年の平均値。‘秋田紅あかり’は平成20年～平成28年（9か年）の平均値。

1 見直し摘果

まだ仕上げ摘果を終了していない園地では早急に行い、着果負担を早めに減らし、果実肥大を促す。

仕上げ摘果終了後、園地を巡回し、見直し摘果を行う。見直し摘果は、小玉果、果形不良果、病虫害被害果、20cm以上の長い枝の果実、枝擦れする果実などを取り除き、商品性が期待できる果実だけを残す。また、樹勢の弱い木や日当たり条件の悪い枝では強めに摘果し、樹勢の強い木や日当たり条件の良い枝ではやや多めに着果させるなど、木の状況に応じた着果管理を行う。

2 樹体管理

6月から7月は降雨量が多く、新梢が急速に伸長する時期である。苗木では主幹延長枝の成長を促進しつつ側枝候補枝を養成し、成木では樹冠内の光環境を改善し花芽の充実や果実品質の向上を図る。

(1) 新梢の剪去、誘引

苗木では主幹延長枝の成長と競合する強い新梢を剪去する。側枝候補となる新梢は勢いが強くないように誘引をする。

(2) 徒長枝の管理

樹勢の強い木では徒長枝が繁茂し、樹冠内部に光が十分到達しなくなる。摘果作業が終了した頃を目安に早めに徒長枝の剪去を行い、光環境と防除薬剤の到達性の改善を図る。

主枝の基部や主枝から側枝が分岐する部分の徒長枝は丁寧に剪去する。ただし、過度に剪去すると、主枝等骨格枝の背面に日焼けを起こしたり、二次伸長を誘発する恐れがある。適当な間隔で残し、剪去しすぎないように注意する。なお、徒長枝を剪去するときは、基部を残さずきれいに切り、再発生を抑える。

(3) 支柱立て、枝吊り

開心形樹では側枝が下がりすぎて樹冠内部に光が到達しなくなるようなところは適当な位置に支柱を入れて持ち上げる。わい性台樹等主幹形樹の下部の側枝は、果実の肥大とともに下垂して枝が折損したり、地面に接したりすることがあるので、このような側枝は早めにひもで枝つりを行い、適当な位置に保持する。

ブドウ

○生育状況

6月は平均気温が低く、開花は平年より2～5日遅かった。6月30日現在の新梢伸長、展葉数、花穂長は、「キャンベル・アーリー」、「スチューベン」はいずれも平年を下回ったが、「巨峰」、「シャインマスカット」はほぼ平年並であった。

表 ブドウの生育状況 (果樹試験場：横手市 平成29年6月30日現在)

品 種	調査項目	計 測 値			対 比	
		本年	平年	前年	平年 (%)	前年 (%)
キャンベル・アーリー	新梢長 (cm)	180.0	198.1	224.1	91	80
	展葉数 (枚)	16.1	17.4	18.7	93	86
	果穂長 (cm)	16.0	16.5	17.4	97	92
スチューベン	新梢長 (cm)	160.6	166.4	199.8	97	80
	展葉数 (枚)	14.5	15.9	17.1	91	85
	果穂長 (cm)	15.8	18.0	18.8	88	84
巨 峰 (有核)	新梢長 (cm)	143.8	130.2	169.9	110	85
	展葉数 (枚)	15.9	15.6	18.5	102	86
	果穂長 (cm)	22.6	22.3	26.2	101	86
巨 峰 (無核)	新梢長 (cm)	178.9	-	227.4	-	79
	展葉数 (枚)	15.4	-	21.1	-	73
	果穂長 (cm)	22.5	-	28.0	-	80
シャインマスカット	新梢長 (cm)	163.0	112.8	185.2	145	88
	展葉数 (枚)	12.6	12.6	15.6	100	81
	果穂長 (cm)	28.9	30.2	35.6	96	81

* 平年値は過去8年の平均。「巨峰」(無核)は、7年未満のため平年値は示さない。

1 中粒品種の摘粒と着果量

「キャンベル・アーリー」、「スチューベン」は目標果房重を300g程度とし、着粒数はそれぞれ60粒、65粒程度を目安とする。

摘粒は果房を縦方向に1～2列(2列の場合は果房の表面と裏面各1列)果粒を外し、溝が埋まりやすいように果房全体を軽くひねる。

着房数は強めの新梢では2房、中庸～弱めの新梢(80～150cm)では1房とする。ごく弱い新梢には着房させない。最終的な着房数は「キャンベル・アーリー」で1m²あたり8～9房、「スチューベン」で1m²あたり6～7房に調整する。

2 大粒品種の摘粒と着果量

大粒品種の摘粒は、外に張り出した大きな果粒を選び、果房最上部は穂軸を覆うように上向きの果粒を残し、房肩から房尻に向かっては着粒数が少なくなるように調整するときれいな円筒形に仕上がる。

(1) 無核栽培

「巨峰」、「ピオーネ」および赤系大粒品種は、目標果房重を400～450gとする。着粒数は「巨峰」で32～36粒、「ピオーネ」および赤系大粒品種で30粒程度を目安とする。「巨峰」の摘粒は、果房上部から1支梗あたり4粒で3段、次に3粒で3段、2粒で6段、1粒で3段を目安に調整する。

「シャインマスカット」の目標果房重は600～700gとする。着粒数は45粒程度とする。700gを超える大房は目標糖度18%に達しない場合が多いので、着粒数を多くしない。房尻が二股や帯状の果房は果粒が小さいうちに余分な支梗や果粒を摘除す

ることで房型が整いやすい（図1）。

各品種とも摘粒作業は7月20日を目途に終了する。最終的な着房数は、各品種とも1m²あたり2～3房（10aあたり2,500房）に調整する。



図1 「シャインマスカット」の摘粒前後の果房

図2 縮果症の果房

(2) 有核栽培

「巨峰」、「安芸クイーン」などの有核栽培では満開15日を経過すると有核果粒（長楕円）と無核果粒（小さな正円）の見分けがつくので、無核果粒を除去する。着粒数は無核栽培での目安を参考にし、摘粒作業は7月15日を目途に終わらせる。

目標果房重を350～400gとすると、最終的な着房数は1m²あたり3房（10aあたり3,000房）に調整する。

30cm以下の弱めの新梢では良果は得られないため、早めに摘房する。摘房は着粒状況が悪い房、形状が劣る房などを優先に行う。

3 袋かけ

摘粒が終わった後、袋かけは薬剤散布後できるだけ早く行う。また、大粒品種では、縮果症（図2）が発生する場合があるので、被害果粒を摘除しながら袋かけを行う。

4 新梢管理

棚面が暗い園地では、果実品質の低下、枝の登熟不足、さらに、薬剤が届かず病害虫が発生しやすくなる。このため、棚下に木漏れ日が入る程度に新梢や副梢を整理する。

モモ

○生育状況

6月30日現在の「川中島白桃」の果実肥大は、概ね平年並みである（表1）。硬核期は「あかつき」、「川中島白桃」とも平年並みの時期に始まり、硬核期の終了時期も平年並と予想される（表2）。

表1 果実肥大状況（果樹試験場：横手市 平成29年6月30日現在）

品種	調査項目	計測値			対比	
		本年	平年	前年	平年(%)	前年(%)
川中島白桃	縦径(cm)	4.49	4.70	4.62	96	97
	横径(cm)	4.71	4.72	4.82	100	98
	側径(cm)	4.23	4.23	4.32	100	98

表2 硬核期（果樹試験場：横手市）

品種	硬核期始め	硬核期終了予想
あかつき	6/21（±0日）	7/20頃
川中島白桃	6/24（+1日）	7/22頃

*（ ）内は平年差

1 修正摘果

修正摘果は樹上選果と位置づけ、硬核期終了の少し前から実施する。本年の修正摘果の開始時期は7月12日頃とする。修正摘果では着果過多を修正するとともに、果形不良果、発育不良果、病虫被害果などを確実に摘除する。

昨年「あかつき」などで発生した褐色斑点症状（図）は、収穫期には外観上目立たなくなるものもあるが、サビとして残るものもあるため、サビがひどい果実を優先して摘除する。



図 褐色斑点症状

2 新梢管理

モモは頂部優勢性が崩れやすく、容易に樹形が乱れやすいので、新梢管理を徹底する。定植当年は、第1主枝候補枝より下の主幹部の低い位置から発出した枝は基部から剪去する。主枝延長枝の勢力を維持するために主枝延長枝と競合する強い枝は基部葉を残して剪去する。側枝候補枝は強くないように水平近くまで誘引する。定植2年目以降も定植当年同様に管理し、骨格枝の形成に努める。

成木では、受光態勢改善のため過繁茂となっている主枝や亜主枝などの背面の徒長枝の摘心や剪除を行う。ただし、日焼けや樹勢衰弱を招かないよう、取り過ぎに注意する。

ナシ

○生育状況

6月1日の肥大調査ではいずれの品種もほぼ平年値であったが、その後は平年より低温の日が多かったことから果実肥大が鈍化した。そのため、7月1日の定期調査結果は、「幸水」および「豊水」の果実径は平年比で約90%、「あきづき」で約80%となっている。

表 果実肥大状況（果樹試験場天王分場：潟上市 平成29年6月30日現在）

品種	調査項目	計測値			対比	
		本年	平年	前年	平年 (%)	前年 (%)
幸水	縦径 (cm)	2.68	3.05	3.03	88	88
	横径 (cm)	3.16	3.49	3.52	91	90
豊水	縦径 (cm)	2.67	3.18	3.09	84	86
	横径 (cm)	2.95	3.33	3.28	89	90
あきづき	縦径 (cm)	2.38	3.03	3.28	79	73
	横径 (cm)	2.74	3.30	3.73	83	73
秋泉	縦径 (cm)	3.97	4.21	4.06	94	98
	横径 (cm)	3.84	3.88	4.14	99	93

1 見直し摘果

無袋栽培は有袋栽培と比較して着果数が把握しづらく、着果過多になりやすい。そのため、仕上げ摘果終了後も園地を巡回し、『樹上選果』のつもりで小玉果、果形不良果、病虫害被害果等を摘果する。また、枝ずれや番線ずれが起こりそうな位置に着果している果実は、付近の枝や番線にガムテープ等を貼ることで果面を保護する。なお、上向きの果実を残さざるを得ない場合、果梗が硬くなる前に果実が下を向く様に捻ると軸折れ落果を防止できる（図1）。



図1 捻軸処理の様子（満開65日後 左：処理前、右：処理後）

2 「幸水」の裂果防止

「幸水」は満開70～90日頃（本年の場合、中央部では7月15～8月4日頃）の果実肥大が特に旺盛となる。この期間に曇雨天日が続くと裂果が多発する危険がある。裂果が発生した場合、被害果を早期に摘果すると他の果実の裂果を誘発するため、発生がみられなくなってから摘果する。

3 新梢管理

1) 新梢整理の時期と効果

太い枝の分岐部周辺の新梢、主枝や垂主枝の直上から発出した新梢は原則剪去するが、主枝背面の日焼け防止や樹勢維持の観点から、取りすぎには注意する。一方、主枝の赤道部より下から発出した新梢は予備枝候補枝として養成するため、周辺の新梢を剪去または誘引することで光を十分に当てる。

新梢整理は、満開60日後（7月5日）頃を目安に終了する。これ以降の新梢の切除は果実糖度や貯蔵養分の低下を引き起こすため最小限とし、日当たりを確保する場合は誘引や捻枝に対応する。樹勢の弱い木では、背面の強い枝等の最小限の新梢管理を実施し、樹勢の強化に努める。

なお、「あきづき」では腋花芽を着生させるため、樹冠内部への日当たりを重視する。充実した新梢には腋花芽が着生しやすくなるため、翌年に側枝として利用できる。

2) 新梢の誘引（腋花芽の育成）

腋花芽の着生には新梢の伸長停止が必要であり、花芽の分化はその10～20日頃から始まる。そのため、予備枝や不定芽新梢を誘引し、伸長停止を促すことで花芽形成を促進させる。新梢が舟底状になるように枝の中央部を支点とし、棚面に対して45度程度の角度で誘引する。

本年の場合、中央部では「幸水」で7月1～10日頃、「あきづき」で7月5～15日頃に誘引を行う。作業が遅れると新梢が木化して折れやすくなるため、適期に実施する。

「あきづき」の場合、誘引した新梢のうち花芽分化が良好なものは翌年に結果枝として利用し、不良なものは予備枝として利用する（図2）。

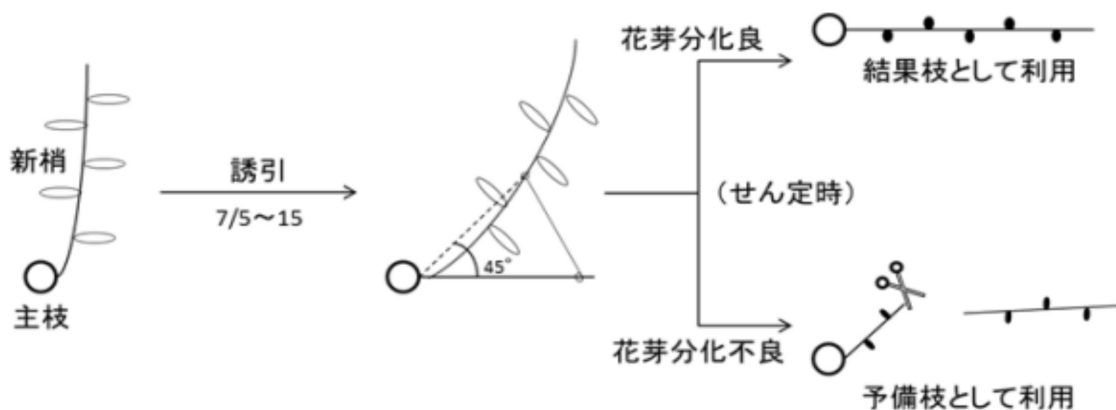


図2 「あきづき」の新梢の誘引方法